

本論「C. H. クーリーの『自己感情』論の現代的展開」は、アメリカの社会学者であるC. H. クーリーの「自己感情」を再評価する過程で、自我と感情との観点から現代における「自己感情」論の展開を目指したものである。

「ニート」、「フリーター」、「ひきこもり」、「熟年離婚」、「下流社会」などといった社会問題を象徴する言葉が氾濫する現在は、どこか殺伐とした雰囲気にも包まれている社会である。この現代社会には、身近な問題からグローバルな問題まで存在している。その解明方法は、もちろん研究分野に異なるが、個人と個人とが存在していることは疑いようのない事実である。とりわけ、個人に焦点を合わせるならば、それは「自我・自己」の問題として取り上げられる。

「この混沌とした時代を生きる現代人の自我の様相はいかなるものだろうか。」ここに本論の焦点がある。人びとは、自我をもって、一個人として日々の生活を送っている。人びとの自我は生得的にもっているとは考えがたく、固定したものでもない。ひとは、この世に生を受けた時、父、母、兄弟、祖父、祖母といった血縁関係の他者、医者、看護婦、隣人、地域集団といった生活のなかでの他者と出会う。ひとは、最初、このような他者から受身的な存在である。しかし、それはある時期までのことであり、他者との共に過ごす生活を通じて、自我が形成し、変化・変容していくことで、他者から受身的な存在ではなくなる。人間の自我が、他者とのコミュニケーションを通じて変化・変容していくことは当然のことである。

しかし、そこには多くの問いかけが必要であろう。自我形成に影響を与える他者とは、いかなる他者なのだろうか。そこで展開されているコミュニケーションとは、どのようなコミュニケーション形態なのだろうか。そのコミュニケーションにおいて、何が生成され、展開されて、自我の形成、変容の要因となっているのだろうか。

人間は自分の顔を自分で見るができない。自分の顔を知るためには、鏡

を見る必要があり、鏡をみることで自分の顔がどうなっているかについて知ることができる。人間の自我もまた、同じく、自分ではわからない。他者という鏡を通して、自我を知ることができる。自我の形成が、他者とのコミュニケーションにより形成される事実をいち早く主張した人物が C.H.クーリーである。彼は 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてアメリカの社会学者として活躍した一人であり、「鏡に映った自我」(looking-glass self) 概念でもって自我の社会性を的確に表現した。

クーリーは、自我が、本来、社会的なものであると考え、他者とのコミュニケーションを通じて自我は社会的に形成されるものであり、それは決して孤立的なものではないと主張する。孤立的なイメージの自我を強く批判し、「ワレワレ」あつての「ワレ」であることを強く主張する。クーリーによると、遺伝で継承されるもの以外は他者とのコミュニケーションや相互作用により発生するものである (Cooley,1909:9=1970:11)。自我もそのひとつとされる。

第 1 章では、アメリカ社会学におけるクーリーの理論の位置づけをおこなう。アメリカ社会学は、南北戦争後の産業化、都市化による社会の混乱を秩序化するために現われた。19 世紀の中葉から 20 世紀の初頭のアメリカ社会学は、スペンサー色の色濃い時代であった。このような混乱する社会を生きたクーリーもまた、スペンサーの進化論に着目していたひとりであった。しかし、彼は個人と社会とを有機的關係であるといったように、スペンサーの考えよりももっと深い意味で社会有機体説を主張する。人間の歴史とは、コミュニケーションの絶えざる発展のなかにある。クーリーの思想は、「人間性」、「組織」、「過程」のそれぞれの視点から展開することで、生き生きとした人間生活として描かれている。

第 2 章では、クーリーの「自己感情」に焦点をあて、他者とのコミュニケーションから生成、形成される「自己感情」のプロセスを辿り、クーリーの社会的自我論を再検討する。クーリーは、「鏡に映った自我」概念でもって、鏡を他者に置きかえ「他者に映った自我」である自我の形成、変化や変容を的確に示した。そこでの他者の意味は、他者の「マインド」を「想像」することから始まる。他者の「マインド」では自分がどのように認識され、評価されているかについて「想像」する必要がある。他者との関わりにおける「想像」によって

「自己感情」(self-feeling)が生じてくる。クーリーの自我論において「自己感情」を自我として規定したところが、彼の特徴である。しかし、孤立的な自我のイメージを強く批判し、他者あつての自我であると強く主張しながらも、「自己感情」に自我を求める見解では孤立的な自我のイメージとは変わらないことになる。「自己感情」に自我を求める見解では、自我の起源、および「自己感情」の起源もあいまいとされてしまうことから、多くの批評的となっている。

次に、社会学において感情は、70年代半ば以前まで、非合理的なものであるがゆえに、研究対象とはならない影のような存在とされていた。感情に関する考察や言及はなされていても、感情に関する社会学独自の理論は不在であった。けれども、今日の社会学においては、A.R.ホックシールドを初めとする研究者の貢献により、感情研究の流れが大きく変化している。第3章では、「自己感情」を展開していくなかで必要とされる感情へのアプローチについて、「マクドナルド化」している社会とそこでの他者との関係から構成される感情の様相を描いている。さらに、ホックシールドの感情論に言及しながら「自己感情」についての新たな位置づけを行なっている。

最終章では、「自分というもの」と「自分ということ」との相違、「対象化された自分」と「対象化する自分」との相違から、自我の位置づけを明確にする。そこから、現在人の感情がコントロールされていることを指摘する。最後に、「自己感情」が2つの主要な焦点により、「自分探し」を可能にさせる感情であるという、「自己感情」論の新たな展開をしている。

この混沌とした時代を生きる現代人には、他者への気づかいが最優先とされ、衝突を避ける傾向にある「優しい関係」が望まれている。このような社会を生き抜くために、現代人の感情は、「こころの知能指数」といったEQによりマニュアル化され、公的領域では「感情労働」が求められ、私的領域では公的領域での「感情労働」に抑圧され「感じなければならない感情」が強いられている。感情が管理されてしまう時代であるからこそ、現代人は、他者とのコミュニケーションにより映し出される「自己感情」と正面から向き合っていかなければならない。

クーリーにおける「自己感情」とは、他者とのコミュニケーションにより構成された各個人の経験により呼び起こされる感情であり、他者が変われば変わ

りゆく感情である。それゆえに、簡単に理解できるが、しかし、曖昧さが残されている。クーリーの「自己感情」は自己意識的「自己感情」へと変化可能な感情である。「自己感情」は、「何を光源にするか」、「何を照準とするか」といった2つの主要な焦点により、自己意識的「自己感情」となり、「対象化する自分」にアクセス可能となっていく。それは「対象化された自分」ではない「本当の自分」と向き合うことを可能にさせ、「自分があるということ」への実現、実感へと辿りつかせる感情である。

今後の感情社会学の研究においても、コントロールされてゆく現状にある感情に対してシグナルを与える感情を明らかにしていくことが必要である。それは、自分が感じる「自己感情」に焦点を当てることで可能となり、「疎外される感情」を克服する感情の鍵が隠されていると考えられる。